

昔は仏教徒のことを“ゼンチョ”という蔑称で呼んだ時代があった。(ポルトガル語で異端者や異教者の意)。山の上に住むキリシタン集落は「上町」、海辺の仏教集落は「下町」という名称が今でも残っており、(あとから移住してきたので海辺近くではなく、山の斜面などを切り開いて住む必要があった)下町で葬儀があると「また一人、ゼンチョが地獄に行く」とか、葬式の棺に故人の好物を入れようとすると「そんなゼンチョみたいなことをするな」と言われたのだという。

当時?は、キリスト教の神を信じたら天国に行けるが、そうでない者は地獄に落ちるという考え、四旬節の前に黙想会に参加すると教会から証明書が発行され、それがないと教会で結婚式が挙げられなかったり、教会の墓地に埋葬してもらえなかったり、生まれてすぐ亡くなった赤ちゃんも洗礼を受けていないために家族の墓とは別の山の墓があったのだそうです。

おじい様から聞かれたお話では、当時は宣教師からこれまで使用していた信仰の道具などを棄てるように言われた人もいたという。宣教師の立場からすればローマで認められた信仰のやり方を勧めることは十分に理解できる。宣教師が全員そうであったかどうかはわからないが、先祖から受け継いできた信仰のやり方を棄てられずに“隠れ”を選んだ人が一定いたのではないかと、という話であった。

また、役人によっては取り締まりの日時をこっそりと住民に知らせ、あらかじめ隠れておくよう教えてくれた集落もあったという。また、「棄てる」と口に出せば、或いは、口にしたことにして、生命を保障したり、匿ってくれたりするお寺さんもあり、寺のお墓の戒名にキリスト教の霊名を刻んだ墓石がたくさんあった。

【生きていく】ためには、共生せざるを得なかったという言葉がこの研修中に何度も聞いた。

病院や孤児院などの世話をするお告げのマリア修道会のシスターの「私たちは踏絵をしたから、今こうして働くことができている。」という言葉がガイドから紹介されたことは、衝撃的でした。

共生するためには違いを認めたり、相手を尊重したり、受け入れたりすることが大切だということ、は、理屈として理解できているが、自分の軸やアイデンティティ、信仰心との葛藤を具体的な日常の中で向き合わざるを得なかった当時の方々は、どれだけ祈ることに時間を捧げられていたのだろう。

祈ることに、キリスト者であることに、何の不利益もない時代に生かされている現代の私たち一人ひとりができることについて、改めて考え直す機会となりました。祈ることは勿論、面倒でも時間がかかっても、対話や調整をする具体的な時間を創り出す努力も大切にしたいと思いました。

白か黒か、侵攻か奪還か、二者択一や多数決は、時短でコストパフォーマンスは高いかもしれないが排除の論理になりかねない。立場が違えば優先される課題も違ってくる。その難しさを感じている時に10月6日年間第27主日のミサで共同祈願のあとに読まれた祈りがピッタリと当てはまりました。

文字数もちょうどよい具合になりましたので、紹介して終わります。

父である神よ、あなたは人が互いに認め合い、助け合って生きることを望まれました。主に従うわたしたちが尊敬をこめた交わりを通して、神の愛にこたえていくことができますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン

